蟲體は耳朶の縁邊に尾部を露出し、體は組織内にあつて膨大して居るが周圍とは癒着なく、生時に於ては簡単に取出すことが出来る。蟲體は大體不正球狀乳白色の膨隆部の前後に極めて小さい前體部と尾部とが附着して居る。膨隆部は第Ⅱ及第Ⅲ腹節間の體節間膜である。従つて前體部は第Ⅱ腹節以前の部分で、頭部には前方に突起があり、眼を全然欠き胸部は狭く3節を合しても第Ⅰ腹節の幅より小である。後體部は第Ⅲ腹節以下であるが體節間の區分が明瞭でない。後方からみると3對の氣門が明かに識別される。膨隆部の内部は異狀に發達した卵巢が充ち、各種發育段階にある卵が見られる。

本種は *Tunga caecigena* Jordan et Rothschild, 1921 と同定される。このものは從來中國から知られて居るが我國では始めて見られたものである。尙ほ人に寄生する *Tunga penetrans* とは、後者に眼がある點で區別されるが、外形も著しく異なる。今回見出されたものが人にも寄生するか否かは明らかでないが、今日迄にはそのような報告はない模様である。

[阪大微研・和歌山醫大]

冬季大阪市内における鼠類と附着昆蟲の瞥見

田中英雄・淺井東一・林 敦 子

Tanaka, H., Asai, T., et Hayashi, A.: A glance over the rodents
and their ectoparasites during winter season in Osaka City

昭和24年12月12日から昭和25年3月17日の間に、前後4回に亘つて、大阪全市22區より、市防疫課の手に依つて集められた鼠を、本教室に於て検査し、その種類、測定、並びに外部寄生蟲の数量的分布等を調べた。

總捕鼠數1880頭の中、ドブネズミが95.3%、エジプトネズミが4.4%、クマネズミが0.3%を占めていた。之等の比率は各區に於て若干の相違はあるが、ドブネズミが壓倒的多數を占める事は共通の現象で、極めて注目に値する。又此等の鼠の中、82.1%が外部寄生蟲を保有していた。外部寄生蟲は總數5709個體で、その中シラミ類が75.2%、ダニ類が14.1%、ノミ類が10.7%を占めていた。更に各類中に於ける比率を見ると、ノミ類ではヨーロッパネズミノミ56.7%、ヤマトネズミノミ35.3%、メクラネズミノミ7.7%、ケオビスネズミノミ0.3%となり、ダニ類ではネズミトゲダニ69.1%、コナダニ22.0%、イエダニ8.9%の割合になつた。シラミ類は全部ネズミシラミと判斷した。又此等の外部寄生蟲總數の中、96.1%がドブネズミに、3.9%がエジプトネズミ及びクマネズミに寄生していた。鼠1頭に附着している外部寄生蟲の平均數は、ドブネズミに3.1個體、エジプトネズミに2.5個體となる。各地區別の外部寄生蟲の種類と比率を通覽すると、殆ど全ての區に於てシラミ類が最も多く、ダニ類とノミ類は區によつてかなり個體數の比率に相違が見られる。

以上の成績から、冬季大阪市内に於ては、ドブネズミが壓倒的多數を占めて從來の知見とは著しい特異點を示し、之に附着している外部寄生蟲の中では、シラミ類が最も多く、ダニ類、ノミ類は比較的少く、且つ寄主の種類や採集地域と、その外部寄生蟲との間には余り顯著な相關關係は認められないと言ひ得る。

[大阪市立醫科大學醫動物學教室]

(14)

寄 生 動 物 1951年 Vol.2 No.1

マダソコガネの種類	集 養 期	産 卵 期	孵 化 期	幼 蟲 期	蛹 期	蟲卵—成蟲	備 考
<i>Aphodius sublimbatus</i>	5月—8月	7月—8月	2—3日	16—18日	5—7日	23—29日	連日、個々に1箇づ ゝ産卵(約7日間)
<i>A. urostigma</i>	6月—8月	7月—8月	5—6日	25—27日	6—8日	36—41日	1回に平均11ヶを 塊状に産卵
<i>A. sordidus</i>	10月	10月	—	—	—	—	以上兩種は成蟲越冬 し、産卵后成蟲は各 種共旬日以内に死す
<i>A. rectus</i>	10月—5月	5月	10日	—	—	—	
<i>A. obsoleteguttatus</i>	11月—4月	3月	—	—	—	—	
<i>A. nigrotessellatus</i>	11月—4月	3月	—	—	—	—	
<i>A. pusillus</i>	4月—5月	3月	2日	—	—	—	